

希望を耕す

インバウンドのインスタ映え

東京大学 特任教授・建築学

松村秀一

Shuichi Matsumura

観光地の宿

高度経済成長期から増築に増築を重ねてきた旅館やホテル。和洋の別や木造・非木造の別を問わず、日本の観光地には付き物のように存在する。宴会の後、右折左折を繰り返して、ちょっとした段差や階段の昇降を経て、やっとのことで自慢の風呂に辿り着く。よくある経験だ。建築関係者同士がそういうところに泊まると、浴衣姿で長めの廊下を歩きながら、「おいおい、これ大丈夫か?」「もちろん大丈夫じゃないですよ」というような会話を交わしていることがある。多くの場合、それは「法令上大丈夫か?」という意味である。

その意味で「大丈夫じゃない」ものは少なくない。典型的なのは、新築或いは増築の工事完了後に、建築基準法の定める完了検査を受けておらず、検査済証を持っていないケース。これでは、竣工時に建築基準法を満たしていたことを証明できない。建物用途にかかわらず、そういう建物は世の中に大量に存在している。必要な確認手続きを経ずに所有者の判断で行ってしまった増築の問題もある。その内容にもよるが、一般的には違法と見なされるものが多い。

さて、これらの「大丈夫じゃない」部分を違法化するにはどうすれば良いのか。最も単純な方法は取り壊して建て替えることだ。だが、それでは費用も多額になる上、休業期間が長くなり、これまで大事にしてきた得意客が離れてしまふことになりかねない。そこで、取り壊さず大規模な改修工事によって違法化できないかということになる。だが、これも一筋縄ではいかない。

新築時や増築時の図面一式が残っていないケースも多いから、今使っている建物を実測調査して現況を示す図面を作成し、建築基準法の定める確認手続きを経て、既存不適格建物としての法的に位置付けてもらう必要がある。そしてそこから現行法規に照らした不適格部分を是正する改修設計を行い、大規模な改修工事の許可を得て着工するという運びになる。その過程で予期せぬ建物の実体に出くわして想像もしていなかった対応を迫られることも珍しくないだろう。しかも短期間でそれらのプロセスをまとめ上げなければならぬ。タフな仕事だ。

河口湖

大学の後輩の女性建築家が、ほぼ一人でそのタフな仕事をやり遂げたと聞いたので、その仕

事ぶりを見に行った。河口湖で長く営業してきたというホテルだった。様々な制約条件を勘案すると、後輩の仕事ぶりは頭の下がるものだった。泊まり心地の良さ、食事の美味しさ等から、オーナーとの意思疎通の良さもよくわかった。建物だけではない。コンテンツあつての旅館業である。

ところで、河口湖は久しぶりだった。私が若かった頃、人気では山中湖が河口湖を随分上回っていたように思う。だから、河口湖のホテルを大規模改修したと言われても、具体的なイメージがわかなかった。ところが、驚いたことにそのホテルだけでなく、現地の食堂も駐車場も満杯、実に賑わっていた。「ほうとう」を注文する声でわかったのだが、圧倒的にインバウンドだ。ホテルでの夕食時にも、テーブルの大半は、中国人と思しきカップルや東南アジア系の家族連れが占めていた。

銀座や心斎橋、祇園のような大都市の観光スポットがそういう場所になっていることは知っていたが、河口湖のような場所もそうなのではないかと、不覚にも認識していなかった。聞けば、富士山の見え方、湖の形、交通の便の良さ等、河口湖が本来備えていた特長を再評価して、そ

の人気を高めたのも、インバウンド観光客であり、インスタグラム等での彼らの発信が力になったとのことだった。

「場」の評価の変容

そう言えば、後輩による施設案内でも、特に個室の窓やバルコニーの設計では「インスタ映えを狙った」という説明が聞かれた。一〇年前には想像もできなかった設計の注力点である。電車でも、隣の客のスマホ画面に、インスタグラムの写真らしきものが次々と出てくるのを目にすることが多い。膨大な量の写真をどんどんフリックして行って、ふと気になった写真があるところに戻るといふパターンが多い。インスタ映えする写真に戻っているのだろうかと思像する。

世界中の人が、そうやって建物の部分やそこからの景色で構成される「場」の質を視覚的に評価し、それが具体的な来訪や利用に繋がる時代なのだ。建築の専門家だけで建築を評価し合う旧来型の閉鎖的な世界は、そういう国際的・行動的な一般の人々による表現や評価に呑み込まれることになるのだろう。建築が人々に開かれていくこの感じ。とてもわくわくさせられる。



近年の筆者の写真でインスタ映えしそうな(?)もの。(リスボンにて、森田芳朗氏撮影)